

# 義太夫

義太夫協会会報  
第86号

平成20年1月1日

社団法人 義太夫協会発行  
〒104-0061 東京都中央区銀座  
4-13-11 文明堂3F  
TEL・FAX (3541) 5471  
<http://www.gidayu.or.jp>

## 江戸に学ぶ

社団法人義太夫協会会長

波多一索

新年おめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

このところ「江戸ブーム」とやらで、あちらこちらで「江戸三百年の知恵に学ぶ」といった講座が目につきます。

平成十八、十九年と二年にわたり江戸東京博物館、小学館が実施した「江戸文化歴史検定」試験には、予想を上回る受験者が殺到しちょっとした評判になりました。

主催者は、受験者が当初は五千人くらいと想定していたところ、なんと結果は一人人を上回る人が集まり、出席出来なかった方々からはいまだに今後の試験の実施予定についての問い合わせが絶えないといったほどです。

それにしても不思議なのは、京都や奈良の観光ガイドの募集と違って、この試験に受かったからといって、直ちにそのことが就職に結びつくといった実用的な特典があるわけではないということです。

試験の内容は、四肢択一マークシート方式で全百問の出題（七割正解合格）で、一例をあげると「火事と喧嘩は江戸の華といわれるように、江戸はたびたびの火災に見舞われました。では明暦三年（一六五七）の大火を機に創設された消防組織は次のどれでしょう？」とあって「①大名火消②定火消③店火消④町火消」から正解の②「定火消」を答えるといった内容です。

こうした雑多なことがらについての知識が、そのまま浄瑠璃の鑑賞に役立つとは思いませんが、今とことなる江戸の人々のライフスタイルや考え方を理解するには役立つかも知れません。

こうした「江戸熱」について、江戸文化の名案内役だった杉浦日向子さんは、三百年の江戸の泰平が都市部の長屋の住人にもたらした「江戸の特色」を、今では失われたライフスタイルとして「モノをできるだけ持たない、出世しない、悩まない」の三ない主義と分析しておられます。

江戸という時代は、経済的には今ほど豊かではなかったにせよ、今日のような自然環境の破壊とか、殺伐とした事件など見当たらず、自然が豊かで空が青く、縁側で近所の方たちとお茶を呑みながら世間話をかわす親密な共同体がありました。比較してみても、どちらが幸せな世の中か考えさせられることがあります。

明治期以降の近代化されたわが国は、昔からの方法を変えることによって生じるプラスの面だけに目を向けて進んで来たのに対し、浄瑠璃を聞きながらそのことによって失ったものを見直す時期に、そろそろ来ているのではと思ったりしています。

賀 春  
ひなぐち年賀状



○子歳の新春、本年は年男でございます。相  
変わりませず御指導のほどをお願い申し上げます。  
葵太夫

○どうぞ今年もおだやかな良き年であります  
ように。 朝重

○あけましておめでとうございます。今年も  
おいしいものを食べ、基礎体力をつけ（意  
外？）前向きにがんばります。 綾一

○平成二十二年は、女流義太夫公演発足より  
六十年、演芸場に替ってから二十年の節目  
です。今年から記念公演の準備を…。 綾太夫

○あけましておめでとうございます。  
今年もネズミの様にチヨロ〜チュウ〜動  
ける身軽な体でいたいです。 綾之助

○百歳になる祖母は、まだまだ元気です。長  
生きしてくれているおかげで、一族のまと  
まりが強くなっている感じがします。賀寿  
○昨年中は温かいご指導を頂き誠に有難うご  
ざいました。皆様には益々お健やかな佳き  
お年となりますようお祈り申し上げます。

○？まわり目の年女。がんばります！ 寛也  
賀津女

○あけましておめでとうございます。  
爽り多き年になりますよう精進したいと思  
います。よろしくお願いいたします。 京之助

○謹んで新年をお慶び申し上げます。  
本年も変らず御健勝で斯道精神を叶へられ  
ますよう祈願申し上げます。 清太夫

○生物の幸を願って。科学の素晴らしい発展  
の今、それに反し世の中の生地獄。新年を  
迎え、さあ、真の幸へ希望の光を求めて！ 幸治

○今年の夢IIパリでホロストフスキーのロド  
リーゴとナダルの全仏4連覇を見て、帰りに  
ミュンヘンでカーンの引退試合を観戦！ 越京

○「いささかに 顔あらたむる 初稽古」  
本年もどうぞよろしくお願いいたします。 越孝

○長年夢だった物を買った途端、物欲が失せ  
てきました。今欲しいのは、師匠の健康、  
稽古の時間。金では買えないものばかり。 越春

○いつも私の体を気遣ってくれてありがとう。

お蔭様で昨年健康でいられました。今年  
もなんとかがんばれそうです。 越道

○あけましておめでとうございます。今年こ  
そお客様、義太夫協会の皆様&私にも良い  
年になりますようお祈りいたします！ 越若

○昨年後半、ロシアでお肉を食べ過ぎてしま  
ったので、今年は野菜をたくさんとるよう  
に心がけたいと思います。 駒清

○明けましておめでとうございます。干支も  
初めに帰り、又新たな気持ちで一年を過ご  
して参りたいと存じます。 駒之助

○明けましておめでとうございます。今年も  
与えて頂きました一日一日を大切に過ごし  
てゆきたいと存じます。 三寿々

○本年もよろしく願います。 慎治  
○新年おめでとうございます。本年も又タン  
タンと進んで行く事が出来ますよう、よろ  
しく願います。 谷太夫

○今年は昼夜問わず夢中に精進しそろそろ中  
古の身体にも注意し忠実にまだ中途の道を  
歩き進めたい。中国で五輪。甥は中学生。 津賀榮

○時のたつのは早く、ふと気づくと、年下の  
方ばかりの中で仕事してたりして：芸は  
成りがたし、ですが： 津賀寿

○入門から今年で十年目、初心を忘れず前進  
あるのみ！本年もどうぞよろしく願います。 津賀花

○御無沙汰してます。昨年は入院の繰り返し  
で大変だったが、おかげで調子は少々な

れ共、戻り掛けている様子。今年こそ、今年こそ。

時若

○地球温暖化が急速に進んでいます。義太夫か、人類か、どちらが永く生きられるか、何だかとても心配です。

土佐恵

○新年おめでとうございます。あわただしくめぐる年月。自分の歩む道を真直ぐに：と  
思う年明けです。

土佐子

○あけましてお芽出とうございます。今年も年忘れ頑張ります。どうか宜敷くお願い申し上げます。

友路

○謹んで新年のお喜びを申し上げます。皆様  
の御健康と御多幸をお祈りいたします。

寿治郎

○変えるべきは変える 守るべきは守る 日本  
の伝統文化 今年も伝えていきますよ。

松也

○おめでとうございます。何事にも、念には  
念を入れ油断せず、万事にわたり余裕を持って、穏やかな気持ちで過ごしたいです。

道太夫

○今年は！身のまわりにあふれている物・も  
の・物、なんとかしましよう。

素丸

○日々フレッシュに、また多くの笑顔と出会  
える様努力して参ります。今年もよろしく  
お願い申し上げます。

紋榮

○「ストレッチをするの良いよ」と、体のこ  
とを越道お師匠さんに心配していただいで  
いる私。どうぞお師匠様もお元気で！ 弥栄  
○あけましておめでとうございます。今年  
は平成の節目の年 思い出に残る良い年とな

りますようがんばります！いろいろとー

弥吉

○「今年こそと」

毎年思うお正月」

本年もよろしくお願い致します。弥清太夫

○今弟子に稽古演目。先代奥、八陣、爪先鼠

鼠道行は皆鼠が出る。子年の人はよく働く

という。今年も更なる経済成長を願う。

弥乃太夫

○過ぎたことはふりかえらず、これからのこ  
とは心配せず、今を充実した時にしたい。  
平和で災害のない年になりますように。

弥舟

○明けまして、おめでとうございます。二度  
目のひとつくち年賀状になりました。今年も  
どうぞよろしくお願いいたします。弥々

○平成もあつという間に二十年！ 身を引き  
締め一日一日を大切に積み重ねて精進して  
参りたいと思います。

佳之助

○新年おめでとうございます。本年も、昨年  
と同様によりしくお願いいたします。

事務局 柴田良子

### 義太夫教室六十期記念

— OB同窓会開催 —

昨年七月二十八日(土)、銀座の東武ホテル  
の龍田の間において、OBの同窓会が開かれ  
ました。

現在、OB演奏会は年に一回行なわれてい  
ますが、この様な形式の会は、今回初めてと

の事です。

卒業してからもお稽古を続けていらっしゃる方、賛助会員になって、女流義太夫を応援して下さる方も多勢いらっしゃいます。そういったOBの皆様のの中から、ぜひ一度教室の同窓会を——とのご要望があり、今回実現の運びとなりました。

第一期生でもある、弥乃太夫師のご挨拶で始まり、先輩OBの方々からは、当時の思い出話などを披露して頂きました。

又、この会の為に久し振りに特別お稽古をしたとおっしゃる、OB七名による、「野崎村」のリレー式演奏。そして、教室出身者を中心とした正会員による「七段目・茶屋場」の天地会。

皆様、このサプライズ？に、大いに楽しまれた様です。

参加者七十名、美味

しいお食事を頂きながら親睦を深め、和やかな内にお開きとなりました。



## 還暦を迎えた義太夫教室

竹本弥乃太夫

昭和二三年、戦争で焼け野原になった東京も徐々に復興の兆しが見え始めた。邦楽も盛んになりつつあった中、戦前あんなに盛んであった義太夫だけは、難しい面白くないという先入観のため急速に大衆人気から離れてしまった。近世の芸能の中で最も文学的で、庶民の生活、感情をよく伝えていた義太夫がここまで大衆の気持ちから離れてしまったのは、その芸の本質に対しての理解不十分と、表現における近代感覚の欠如があるからではないか。このままでは義太夫が衰退してしまう、その危機を救うため豊竹湊太夫師他多くの関係者の肝いりで義太夫教室が誕生したのである。「浄瑠璃についての基礎的知識、作品の価値判断と選定、本文の批判検討と正しい解釈、語り物であっても、併せ持つ音楽面の研究、これらを見直して新しい文化領域に生かす」これが教室の宣伝文句であった。各方面からの激励や協力は予想を大きく上回った。

昭和二三年六月十五日午後五時、発会式は銀座P.X裏の朝日クラブで行われた。百畳もある広い座敷に生徒は私を含め五人だけである。担当の先生は、野澤吉二郎、鶴澤三生、豊澤猿幸の各師匠方と、豊澤芳太郎(後の松太郎)、坂本あるを(後の豊竹湊太夫)、竹

本土佐広、川口子太郎、安藤鶴夫の各氏など。教室は京橋慎町の飯泉さん宅。授業は月水金、五時半から九時まで。後に六時からになる。

当時は一期四ヶ月の授業で、各期を終えても、そのまま残留し稽古ができる。月謝は三百円だった。当初期の授業内容は、

第一期 野澤吉二郎(基本理論、発声法)、鶴澤三生(太十)、豊澤猿幸(野崎)

第二期 野澤吉二郎(基本理論・アクセント)、鶴澤三生(毛谷村)、竹本綾之助(宿屋)

第三期 実習 野澤吉二郎(音譜による短編集)鶴澤清八、鶴澤三生(安達三)

※此の実習は昇界初の試みとして大いに注目された。更に此の期は、文楽から清六師のご指導を得て、新聞紙上に写真が掲載され紹介された。

第四期 野澤吉二郎(基本理論・曲節の分解)

鶴澤三生(妹背山御殿)竹本綾之助(新口村)三宅周太郎、川口子太郎、豊竹若大夫(文案)

以下思い出すまま発会当初のエピソードを記してみよう。

★録音と写真 N.H.K.が我々の稽古を収録に came。太十の実科と、吉二郎師の発声法を録音。数日後の朝七時十五分、市民の時間で公開される。スクリーンステージ社より写真班来る。吉二郎師の学科の一コマが撮られる。

★漫画 読売新聞の漫画家、近藤日出造氏が野崎の稽古風景をスケッチ。その文章に曰く

「これは近頃変わった風景である。生徒何れも一心に稽古している。猿幸師の(お灸の)「アツツ」は聞かれるが、生徒の「アツツ」はてんで聞けない、素っ頓狂な声の交錯でお灸らしくない、だが今若い女性も交えていと言うに、笑いもしないで熱心なことではある。」云々。十月号雑誌「婦女界」に掲載された。

★竹本土佐広師の酒屋 二三年十月教場で土佐広師が、豊澤猿幸師の糸で酒屋をマクラからサワリまで模範演奏。初めて目の前での演奏に大感激、すっかり陶醉させられた。土佐広師曰く「お園がどんな美しい、綺麗な声が出てくるだろうと思っていらいっしやるだろうに、こんな年寄りではネエ。」とんでもない、一同一言も発せられず芸の深さに頭が下がった。

★発表会 未完成ながら、第一期義太夫教室発表会が十月十日(日)、有楽町にあった丸の内保険協会講堂で開かれた。小雨もよいの曇り、演目は「野崎村」と「太十」の二曲、あとは東京在住の教室世話人方による「忠臣蔵七段目」。何しろ初めての舞台で朝から皆大忙し、リヤカーで数回小道具類を築地から運び、舞台設定、ピラを有楽町の四つ辻電柱に貼る。初高座なので前側のライトがまぶしく感じた。橋本氏は胸に十字を切っていた。クリスチャンかと思ったら、舞台の出のおまじないと後で分かった。会は大成功で、竹本都太夫、土佐広師も早くから駆けつけて皆一様に褒めて下さった。

★邦楽道場 両国橋のたもと、出羽の海部屋が改装され邦楽道場になる。教室の発表会は此処で頻繁に行われた。第二期教室の劇場で義太夫教室は一年一期、十一期まで続き、以降は閑古鳥が鳴いた。協会近くの浅草橋駅で生徒募集のビラを撒いても一向に反応がない。現義太夫協会が法人化した一九七〇年に、目玉として義太夫教室の再建に向け建ち上がった。丁度古典が見直された中で、なんと六十人を超す応募者で賑わった。今までの不振を取り戻し名誉挽回、現在に引き継がれている。

### 乙女文楽ロシア公演

昨年9月17日より10月3日まで、ひとみ座乙女文楽のロシア公演があり、義太夫協会から土佐恵・土佐子・賀寿・駒清が参加しました。

演目は「道行初音旅」と「壺坂 山の段」。5都市—エカテリンブルグ・チュメニ・オムスク・トムスク・モスクワ—での追加公演1回を含む19公演は、ほぼ全回満席、好評のうちに終了しました。以下はロシア公演ごぼれ話—。

#### ○歓迎!!

遠い日本からの一行を迎えるにあたり、各地でさまざまな工夫をこらして下さいました。劇場ロビーを日本の着物や人形で飾ったり、



エカテリンブルクの劇場

俳優さん達が日本風のパフォーマンス（歌舞伎や柔道）をしたり、あるいは日本語で歓迎の言葉を書いたパネルを持って駅まで来て下さったり。お返しに(?)義太夫陣4人で「走れトロイカ」を演奏したり、日露一緒に「隅田川」を歌ったりもしました。

#### ○ゴージャス♡

ロシアでは演劇が非常に盛んで、各地に劇場がたくさんありました。今回公演を行った場所も、ほとんどが人形劇専門の劇場でした。それぞれの劇場に所属の劇団があり、逆に言う自分達の劇場を持たない団体は劇団とは認められないそうで、これは日本とは大きく違うところですね。どの劇場も立派で、中には建物内に庭園が併設されている所も。

#### ○オーチン・ラークスナ(おいしい!!)

果たしてどんな食べ物が出てくるのか、出発前は皆、期待半分、不安半分でした。が、どこへ行っても予想を遥かに超えたおいしさ!!、朝はパンにサラダ、チーズなど。昼がいちばん重く、サラダ、スープ、メイン。スープはボルシチは勿論ピクルス入り、パスタ入り等種類が豊富で、毎日何が出てくるか楽しみでした。夜はサラダ、メインにデザート。メインのつけ合わせはじゃがいもが多く、主食のような扱いでしたが他にもキャベツの煮たもの、ラタトゥユのようなもの、変わったところでは、そばの実をゆでたものもありました。

以上、少しはロシアの空気をお伝えできましたでしょうか……。



人形を遣うオムスクの劇団員

ほんに気がメロリヤス(四杯目)

鶴澤慎治

先回、竹本のメリヤスには、地歌から移入したものが相当数ある、と書きました。

ぱっと思いつくものだけでも、『残月』『アサドテ』『朝戸出』『雪』『竹の縁』など、比較的使用頻度の高い曲目が「舶来品」です。では、義太夫節の演奏の一形態である竹本から見て、地歌は「遠く離れた異国の地」なのでしょいか？

確かに、現在我々が耳にする竹本と地歌とは、そう思われても仕方がないくらい別の音楽、という印象があります。いずれこの項でもやってみたいと思っしていますが、地歌から採られた現行の竹本メリヤスと元の地歌曲とは、五線譜に起こして比較すれば、よく似ていることが視覚的に理解できますが、実際の音を聞き比べると、「どうしてこの曲がこんなになっちゃうの？」と感じるほど印象が違うものもあります。

しかし、いずれも同じ三味線音楽であるからには、必ずどこかにつながりがある訳で、まずその共通項である使用楽器Ⅱ三味線の伝来あたりからその関わりを見ていきたいと思います。

義太夫節と地歌は、いずれも上方で生まれ育った三味線音楽ですが、その源流をさかのぼっていくと、いずれも盲人音楽家が関わっています。

元々平曲(へいきょく)。平家物語の琵琶による弾き語り)の演奏家であった盲人の琵琶法師は、中世頃からその同業者による座「当道(とうどう)」を形成し、平曲の上演権を独占していました。

彼らは16世紀には、三河地方に伝えられる牛若丸(義経)と浄瑠璃御前の恋物語(通称『浄瑠璃物語』『十二段草紙』など)を語るようになっていましたが、当初扇拍子や琵琶を使って語られたその曲節が他の物語にも使用されるようになり、それらを浄瑠璃と総称するようになった、というところまでは、よく耳にされているところと存じます。

そこへ、永禄年間(1568~1569)、つまり鉄砲より少し後に、琉球から伝来した三線を基に三味線が成立して以降、それまでの琵琶や扇拍子に代えて、澤住(さわすみ)検校、滝野検校といった盲人音楽家が、三味線で浄瑠璃を語ることを始めたといわれており、これが義太夫をはじめとする、三味線を伴奏楽器とする語り物の音楽Ⅱ浄瑠璃の始まりとされています。

一方、表芸である平曲の他に、小編歌謡をレパートリーに加えていた盲人音楽家が、当時流行したそれらの歌詞のいくつかを組合わせ、三味線を用いて作曲・演奏したのが、現在地歌と呼ばれている音楽の源流である「三味線組歌」で、これは石村検校、虎沢検校らによって慶長年間(1596~1615)頃始められたとされています。

つまり、三味線が成立して後、その楽器の

演奏を職能とする盲人音楽家は、ストーリーテラー(浄瑠璃)の道を行く人と、シンガーソングライター(三味線歌曲、ただし歌詞を自分で書くのは稀)の道を行く人に分かれた、ということになるわけです。日本音楽の研究ではこれを「語りもの」と「歌いもの」として区別しています。

で、このシンガーソングライターの道、即ち「三味線組歌」を源流とする地歌、そして箏曲は、平曲、鍼灸、按摩などの職能と共に盲人の専業として保護された一方で、ストーリーテラーの道、浄瑠璃の方は、人形劇、後には歌舞伎と結びついて劇場音楽として発展するに従い、次第にその担い手は晴眼者に移っていきました。

それが400年の歳月を経て、現在存在する語りもの、歌いものそれぞれの各派の三味線音楽となって発展してきたわけですが、皆様よくご存知の人形浄瑠璃・歌舞伎の歴史に、地歌の歴史を照らし合わせると、実に興味深いものが多く見受けられます。それらの中の一つが、地歌に由来するメリヤス、ということになります。(以下次号)



協会の動き

07年7月より  
08年1月まで

7月19日 女流義太夫演奏会  
於国立演芸場

7月26日 公益法人説明会  
於都庁会議場

7月28日 義太夫教室60期記念パーティー  
於TKビル3階

8月1・2日「ぎだゆう座」二日間  
親子で楽しむ義太夫の会  
於上野広小路亭

8月2日 公演部会  
於銀座モナリザ

8月3・4日 鶴澤駒清素浄瑠璃勉強会  
重の井子別れの段  
於上野広小路亭

8月6日 経理会議  
於弥乃音

8月7日 瑞生大祭60周年全国信徒大会  
於かめおかコンベンションホール

8月22日 女流義太夫演奏会  
若手勉強会  
於国立演芸場

8月24日 「花競四季寿」ほか  
乙女文楽打合せ  
於国立演芸場

8月25日 備品部会  
於本郷稽古場

9月1・2日 一日体験教室  
於TKビル3階

9月3日 「じよぎ」公演  
二日間  
於上野広小路亭

9月4日 編集部会  
東京都公益法人実地検査  
於協会資料室

9月6日 義太夫教室第60期中級開講  
於TKビル3階

9月19日 女流義太夫演奏会「袖袂祭文の段」  
ほか  
於国立演芸場

9月19日 乙女文楽ロシア公演  
エカテリンブルグ・チュメニ・オムスク  
トムスク

9月26日 常務理事会  
於協会資料室

10月1・2日「ぎだゆう座」公演  
二日間  
加賀見山旧錦絵  
於上野広小路亭

10月3日 公益法人説明会  
於都庁会議場

10月8日 第10回駒之助の会  
於紀尾井ホール

10月16日 日本芸術文化振興基金説明会  
於駒場エミナース

10月18日 女流義太夫演奏会  
桂川連理榊  
於国立演芸場

11月1・2日 「じよぎ」公演  
二日間  
於上野広小路亭

11月3日 祖先祭  
於両国回向院

11月5日 乙女文楽中学校公演出演  
魚沼市守門中学校・南砺市福野中学校  
小松市松東中学校・福井市清水中学校  
丹後市峰山中学校・福知山市清和中学校

11月19日 女流義太夫演奏会  
仮名手本忠臣蔵  
於国立演芸場

11月21日 編集会議  
於協会資料室

11月21日 邦楽演奏会番組編成会議  
於(財)古曲会事務所

11月26・27日 鶴澤駒清素浄瑠璃勉強会  
沢市内より壺坂寺の段

12月1・2日 「ぎだゆう座」公演  
二日間  
仮名手本忠臣蔵  
於上野広小路亭

12月8日 鶴澤津賀花 研修発表会  
大和屋の段  
於上野広小路亭

12月9日 第87回大日本素義会  
於鳥越神社白鳥会館

12月19日 女流義太夫演奏会  
障害者の為の  
特別公演 仮名手本忠臣蔵  
於国立演芸場

1月1日 会報第86号発行

友路師に旭日小綬章

昨秋の叙勲で鶴澤友路師が旭日小綬章を受章されました。これからますますお元気で御活躍下さい。



今後の予定

- 1月6日(日) 鶴澤三寿々 於お江戸日本橋亭 第五回素浄瑠璃の会
- 1月10日(3月13日)(木) 義太夫教室 第60期上級 於TKビル
- 1月12日(土)「ぎだゆう座」初春特別公演 於お江戸両国亭
- 1月28日(月) 女流義太夫演奏会 於国立演芸場
- 2月1日(木)・2日(金)「ぎだゆう座」公演 二日間 於上野広小路亭
- 2月6・13・20日(木) 悠遊ライフ芸能講座 義太夫を体験 於芸能花伝舎
- 2月25・26日 女流義太夫の新たな世界 於紀尾井小ホール
- 2月27日(水) 女流義太夫演奏会 「伝承者研修発表会」 於国立演芸場
- 3月1日(土)・2日(日)「じょぎ」二日間 於上野広小路亭
- 3月8日(土) 東京都邦楽演奏会 於国立小劇場
- 3月9日(日) 義太夫教室OB会 於スペースFS汐留
- 3月21日(金) 女流義太夫演奏会 於国立演芸場

※前号にて「ぎだゆう座」初春特別公演の日付を1月5日とお伝えしましたが、12日の間違いでした。お詫びして訂正します。

義太夫節保存会平成19年度人材育成支援事業の特別研修を受けている鶴澤津賀花と鶴澤駒清が研修の成果を発表する演奏会を開催いたします。(いずれも無料です) 平成20年

1月19日・20日 鶴澤駒清 素浄瑠璃勉強会 「妹背山婦女庭訓 金殿の段」 於両国回向院

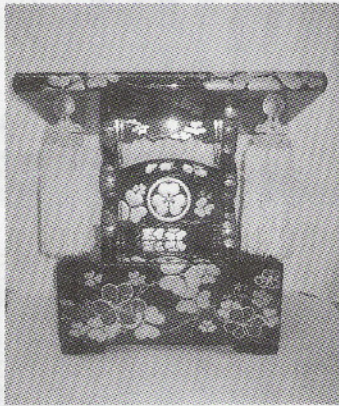
2月16日 鶴澤津賀花 第四回研修発表会 「源平布引滝 九郎助住家の段」 於お江戸日本橋亭

〈寄付〉

大日本素義会様 三万円  
出月清人様 五万円

〈寄贈品〉

上野文子様 見台



〈訃報〉

豊澤雛代師が平成十九年十一月十一日に、ご逝去されました。慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

〔芸歴〕

大正九年(一九二〇)十二月四日大阪生まれ、昭和三年竹本雛昇に入門、竹本雛代と名乗る。昭和七年初舞台。昭和九年以降、七生竹本文字大夫、豊澤新造、野澤喜左衛門、野澤吉也、竹澤弥七等に師事。

昭和三十五年、四十四年、五十三年、五十七年因協会奨励賞受賞

昭和四十三年豊澤雛代と改名

昭和四十七年人形浄瑠璃因協会賞受賞

昭和五十五年重要無形文化財義太夫節総合指定保持者に認定

【編集後記】

- 優秀な編集部員のおかげで無事発行となり。(T)
- 足手まといにて初参加、見事な進行に感激。(A)
- 新入部員です。久しぶりに原稿用紙を使いました。(A2)
- メールデビューしました。超便利で日々、技術みがいています。(M)
- 卒業したはずだったので。(K2)
- また寒い季節が、冷え症にはツライよ。(K3)
- 再び登板となりました！(Y)